

矢作橋と岡崎

岡崎市美術博物館
学芸員 堀江登志実



岡崎市の美術博物館の堀江です。今日は「矢作橋と岡崎」ということで、お話をさせて頂きます。江戸時代の岡崎は東海道の宿場町ですが、その岡崎宿を描いた浮世絵というのは、大方が矢作橋を入れながらその遠景にお城を入れて描くというのがほとんどです。岡崎の宿場のなかを描いた物というのはほとんどございません。まあそれだけ矢作橋というのが一種の岡崎の代名詞みたいなものになっていたわけです。それには矢作橋というのが当時日本で最大の長さを誇る橋であったという歴史的事実があります。後で紹介させて頂きますけれども、道中記にも当時日本一だった矢作橋が旅人の注目を集めたことが記されます。まさに、矢作橋というのは岡崎の代名詞と言ってよいでしょう。

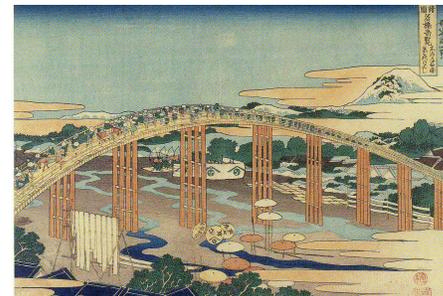
1. 浮世絵にみる矢作橋

最初に、この浮世絵の矢作橋を見て頂きたいと思います。スクリーンの方をちょっとご覧下さい。いま映っておりますのは葛飾北斎の雪景色の岡崎宿です。横長で、非常に繊細で優美な浮世絵です。向こうに見えるのが甲山、または村積山でしょうか。北斎の「諸国名橋奇覧東海道岡崎矢はぎのはし」という作品でして、北斎は全国の色々な橋をいくつか描いていまして、この矢作橋もその中のひとつです。弓張りで太鼓橋と言いましょか。反りの強いところが強調されている作品になっています。これは天保5年に作成されたというふうに言われております。それから、これが一番皆さんご存知かと思いますが、歌川広重、安藤広重とも言いますが「東海道五十三次之内岡崎」ということで、やはり大名行列が過ぎゆく矢作橋を描いています。遠景に岡崎城を入れながら描いております。

それからこれが五雲亭貞秀の「三州岡崎矢矧大橋勝景」と言う文久3年の作品です。徳川将軍の家茂が上洛する場面を描いているというふうに言われています。家茂は3回程上洛しています。今NHKドラマの篤姫でも出てきたところですが、文久3年に2回、それから慶応元年に1回です。これはどれかの上洛を描いているかと思いますが、



145 葛飾北斎 岡崎
雪景色の矢作橋を描く。



144 葛飾北斎 諸国名橋奇覧 東海道岡崎矢はぎのはし
北斎が「諸国名橋奇覧」として描いた11の橋のひとつ。弓張りのような橋の表現に特色がある。天保5年（1834）の作品。



146 歌川広重 東海道五十三次之内岡崎
永永堂版初刷り作品。

ただ、実は当時この矢作橋というのは存在しません。それは安政2年に洪水がありまして、矢作橋は流出して破損し、渡れない状態になっていたのです。ですからこれは五雲亭貞秀が想像でもって描いた絵であります。これも先程の北斎の「名橋奇覧」のように非常に反



149 五雲亭貞秀 三州岡崎矢作大橋勝景
文久3年(1863)2月の作品。

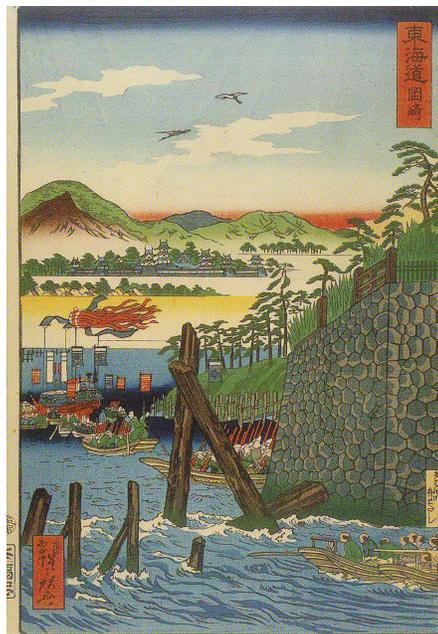
りの強い、反りが強調された橋になっています。それからこれが「末広東海道」というふうに言われているものです。やはりこれは慶応元年の將軍家茂の上洛を描いたというふうに言われています。この慶応元年の時は確か家茂自身は陸路を行くのでなくて、海路、海を行ったというふうに言われていまして、これも結果想像上で作られた作品だというふうに思われます。

それからこれが河鍋暁斎という人が描いた浮世絵でして、文久3年の作品です。これは橋を渡っている絵じゃなくて、橋が流出して渡れない状態になっている絵です。これこそ当時の岡崎の矢作橋の状況を描いているわけでありまして。以上見て頂いたように、東海道の岡崎宿を描いた浮世絵はこれ以外にもたくさんあるんですけれども、大方が橋を題材にしています。有名な日吉丸と蜂須賀小六の出会い、これも江戸末期の浮世絵なんかに出て来ます。いずれにしる矢作橋というのが岡崎の一種の象徴であったようであります。浮世絵というのは必ずしも実状を写していないということは今お話したとおりですけれども、それじゃあ当時の矢作橋の実態に近いものはないのかといいますと、今のスクリーンに映っております『東海道名所図会』に描かれたものがあります。寛政9年、18世紀の終わり頃に出された本なんです。その中の岡崎の紹介の部分に入られている挿図でありまして、当時の矢作橋の景観というか、そういうものがある程度忠実に描いているんじゃないかなというふうに思います。これ見ますと、川が一部であって、やはり半分くらいは砂地というか、よく江戸時代の矢作川は水をたっぷり湛えている



51 二代国輝 末広五十三次岡崎

尾州征伐に向かう行列を描いた末広五十三次シリーズの一つ。慶応元年(1865)閏5月の作品。

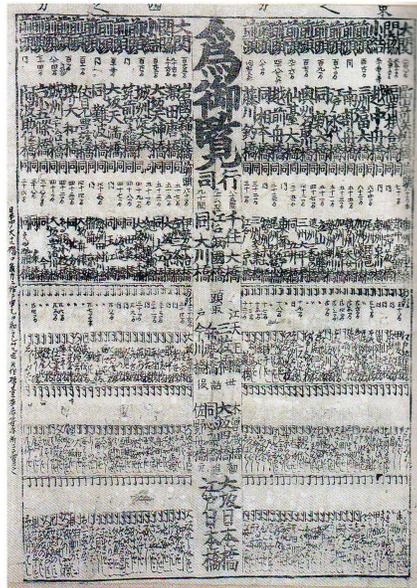


152 河鍋暁斎 東海道岡崎

橋が流され、船渡しが行われている様子を描く。文久3年(1863)4月の作品。

というようなふうにも思われる方が多いんですけど、江戸時代の色々な記録を見ますと、これは後でお話します「三州矢立筆記」という幕府の役人が来て書いた記録のように水が流れているのはごく一部で、やはり現状と余り変わらない景観だったようです。この図もそうした景観を描いているかと思います。

それからこうした矢作橋が日本で一番長い橋だったという事を示すのがこの橋の番付表です。これは江戸時代の時期はわかりませんが、たぶん終わり頃に出された物でありまして、これによりますと東の大関に岡崎矢矧橋が出て来ます。ちょっと見にくいのですが、一番右上に大関 208 間、岡崎矢矧橋とあります。208 間というのは江戸時代の最初で、後に 156 間の橋に架け替えられますが、208 間または 156 間にしる当時として日本で最長の橋だったということに間違いありません。西の大関岩国錦帯橋が 125 間ありまして、まあ二つが横綱と言いましょか。日本の東西の大きな橋であったということがこうした当時の「日本大橋尽」という番付表に記されています。この番付表の中には三河の国内では吉田大橋、こちらの方は 120 間とあります。あと大平橋とかですね、それから小さな橋になりますが松葉橋という岡崎城下から西にちょっと出たところに架かっていた橋もこの中に記されています。矢作橋は東海道の一番長い橋、最長の橋ということになるわけなんですけれども、東海道には大井川とか天竜川とか大きな川があって、そちらの方に何故橋が架けられずに矢作川に橋が架けられたのかということ、非常に皆さん不思議に思われるかと思うんです。これは、江戸時代の記録で湯浅常山という人が「常山記談」という記録で家康時代に矢作橋が流れ、家臣達が家康に相談したことが記されています。家臣たちは城を守るため、また費用がかかる理由から橋を造るのを辞めにしたらどうだというようなことで相談したところ、家康はその進言を受け入れず、橋は旅人の便を考えて造らなければいけないということを言ったそうです。家康の意思により、矢作川には特別に橋が架けられたというようなことが記されています。それが本当かどうか判りませんが、大井川とか天竜川は非常に大きな川です。考えてみますと、この矢作橋というのは当時の土木技術からするともう橋を架ける限界のギリギリだったというふうに見えるんです。これ以上川幅が広がると橋を架けることが当時の日本の技術ではとても無理だったのではないかと考えられるわけなんです。



122 日本大橋尽

日本の橋を東西に分けて番付したもの。東の大関に矢作橋208間、西は岩国錦帯橋125間である。三河では東の前頭に吉田大橋120間、大平橋42間、松葉橋32間など東海道の橋が見られる。

2. 架け替えの歴史

そうした矢作橋ですけれども、ここで架け替えの歴史を見てみたいと思います。今日

用意してきたレジュメの2番目のところに入ってきますけれども、我々がイメージする、今見て頂いたような板橋の立派な橋が出来るのは江戸時代になってからの寛永11年のことです。この年、将軍家光が上洛するときに架けられたというふうに言われております。それ以前にそれじゃあ橋が無かったのかどうかというところになるわけなんですけれども、記録の上からは天正10年、これは信長と家康が一緒になって武田氏を壊滅させたのち、甲斐からの帰りに東海道に出た信長は、矢作川を渡っております。その時の記録が史料です。『信長公記』という記録です。これには「岡崎城の腰むつ田川・矢はぎ川には、是れ又、造作にて橋を架けさせ、かち人渡し申され、御馬どもは、乗りこさせられ、矢はぎの宿を打ち過ぎて」というふうに出て来ます。造作にて橋を架けさせたことが知られます。簡単な橋を架けたのですが、これは船橋かもしれません。舟を幾つかチャーターして、その上に板を架けて橋同然の姿に造ります。船橋と言われているようなもので、この近辺ですと起宿ですね。木曾川の渡しに位置する起の宿の船橋は有名であります。確か信長は天竜川を渡る時に船橋を命令したということがあったと思いますが、矢作川の時も船橋かもしれません。これが天正10年でありまして、それから、その次に史料と をご覧頂きたいんですけれども、これを読むのは時間の都合でカットしますが、『矢作御橋記録』に、土橋で75間の橋があったというふうに出て来ます。天正18年から慶長5年まで、この岡崎の地の城主であった田中吉政が東海道を城下に導き入れて橋を架ける計画をたてますが、それが成就するのは田中吉政のあとに岡崎城主となる本多康重の時代です。その最初に架けられた橋というのが土橋で長さが75間だったようです。この土橋は、史料のように、慶長12年の朝鮮通信史の記録にも出てありまして、「城西大川土橋有、長可三百餘歩」とあります。土橋っていうのはどういうふうに構造上なっているのか詳しいことはちょっとここでは申し上げられませんが、簡単な橋で寛永11年の前に存在していたことだけは確かなようであります。寛永11年の橋についての記述として、史料 林羅山の『丙辰紀行』というものの記録の中に、こういうふうに記載されております。「江戸より京までの間に大橋四あり。武蔵の六郷、三河の吉田、矢矯、近江の勢多なり。ひとり矢矯のみ土橋なれば洪水によりて絶ゆるもあり。」「此頃新に板はしとなりけるにや云々」というふうに、これは寛永15年の出版ですので、この頃というのは寛永11年のことを言ったようであります。この寛永11年の将軍家光の上洛は大部隊を率いて上洛します。軍勢にして何十万という軍勢が動くわけで、岡崎城の中にも将軍が泊まるための御殿が造られたりします。岡崎城主本多氏も接待をして、これによって五千石が岡崎城主に加増されるわけです。この時に橋も板橋に造り替えられるわけです。この時に造られた橋というのが208間の非常に大きな橋であったようであります。ただ、この橋と言うのは寛文10年8月に焼け落ちてしまうんです。

表 をご覧頂きたいと思えます。ここに江戸時代の矢作橋架け替え修復の履歴を示させて頂きました。全部で江戸時代の架け替えは9回あります。現在の矢作橋は今、拡幅工事が行われていますけれども、最近までの橋は昭和26年に架けられた橋です。これ

が寛永11年から数えると13番目の橋なんです。将軍家光の上洛の時の208間の矢作橋ってというのは、寛文10年、明大寺の辺りから火が出まして、それが城下に飛び火して板屋町から橋まで火が移ったそうです。それで矢作橋が焼け落ちました。これは橋の歴史の中で前代未聞というか、洪水で橋が流されるというのは江戸時代の中で8回ありますが、焼け落ちたというのはこれ1回のみです。この焼け落ちた橋が架け替えられるのが延宝2年です。このときに長さが208間から156間はかなり規模が縮小されるわけがあります。1間1.8メートルで計算しますと208間というのは374メートルであります。それから156間というのは大体280メートルです。大体100メートル程規模を縮小して架け直されるというのが延宝2年の橋です。この時に橋桁が7通になります。この時に渡り初めをした連尺町の商人の太田家の記録が残っております。この後第3回目の架け替えが、正徳3年から5年にかけて行なわれ、この橋から橋桁が5通になって行きます。この矢作橋の架け替えの歴史の中で一番の特色というのがいわゆる公儀普請という、いわゆる幕府が直轄工事で橋を架けるんです。これは岡崎藩の藩主がやるんじゃないんです。いわゆる現代でいえば国が行う国家プロジェクトというか、国が直接工事をやるということになります。

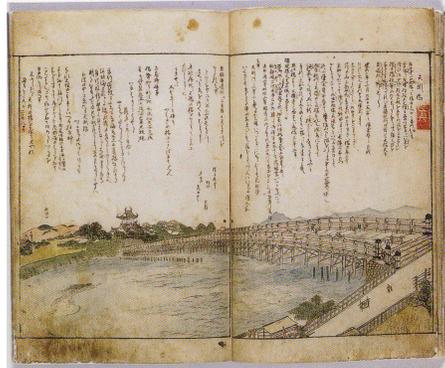
矢作橋の架け替えは公儀普請が大原則ですが、中には御手伝普請と言って大名に普請をやらせるものがあります。これは幕府が直接するんじゃないくて、大名に肩代わりをさせるものです。木曾三川の工事で薩摩藩が行なった宝暦の治水工事が知られています。岡崎のこの矢作橋においても、例えば第5回目の宝暦11年から12年の時には武州忍10万石の領主であった阿部飛騨守が御手伝普請を命ぜられたりとか、安永9年から天明元年、6回目の架け替えの時には、奥州中村6万石相馬氏が御手伝普請を命ぜられています。先日もこの奥州中村の方から来客がありまして、向こうの記録にも矢作橋普請をやったという記録がありますが、本当にこんな遠いところまで来て手伝いをしたのか、そういうのを確かめたくて来られた方がございました。当時相馬氏の家臣達が矢作の勝蓮寺に泊まったっていうのが向こうの記録の中に出て来ますので、勝蓮寺などをご案内しました。こちらの岡崎の方の記録でも「矢作御橋記録」というのが残っておりまして、その中で相馬氏が実際に幕府の肩代わりをして御手伝普請をやったということが記録に出てきます。その他に、数は少ないですけども領主普請、岡崎の城主が修復するというのがあります。これはこの表で申しますと享保18年の修復で幕府に800両支給されて岡崎城主にて修復というのがございます。この時の記録を見ますと、上宮寺境内にある大木を橋の架け替えの杭木にするために、岡崎城主がそれを切ろうとするわけなんですけれども、寺が猛反対してそれは実施出来なかったとあります。上宮寺の記録の中に出てきます。9回目の天保10年から11年にかけての架け替えが行われた後です。安政2年、洪水によって矢作橋が流されてしまいます。以後、20年ぐらい橋が無い状態が続きます。以上の橋の記録は、矢作の岩月さんという方の家に残っている『矢作御橋記録』という資料にもとづくもので、表はこれにより作りました。この資料は非常に面白い記録で、新編岡崎市史の近世資料編の下巻の方に載っておりますので、

詳しく知りたい方はご覧になって頂きたいと思います。

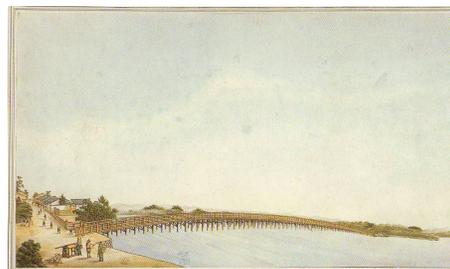
3. 旅人が見た矢作橋

次に旅人が見た矢作橋ということで、最初に高力猿猴庵種信の記録をみてみましょう。

この人は尾張藩の武士であります。『東街便覧図略』という東海道の宿場を描いた記録を残しています。岡崎のところがやはり矢作橋を描いています。ちょうど今スクリーンの方に出させて頂きましたけれども、この『東街便覧図略』の中で猿猴庵自身は矢作橋を描き次のように記しています。資料3ページの史料のところになります。「街道第一の大橋にて橋の真ん中に番所あり」。ちょっとこの絵では判りづらいかと思う

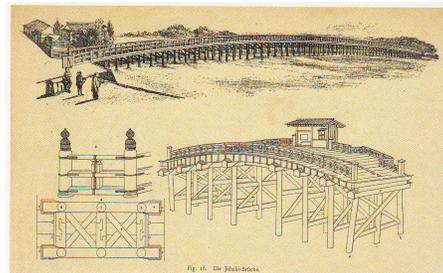


んですが、橋の真ん中に番所があるんです。「西の詰めには突棒指股を飾り、両の川岸には策を結び、河中には数本の杭を立てて川浪をよぎらしむ。」多分ここに杭がいくつか、これはまあ芥除けですが、橋を守る為にゴミとか流木があつて橋を直接傷つけない、痛めないようにするためのものです。さらに「欄干橋柱等のたくましさを初めて通る旅人目を驚かさばかりなり」というふうに猿猴庵自身書いております。それから次にシーボルト。こちらはドイツ人医師で、オランダ商館長と一緒に江戸まで旅した時のものに『江戸参府紀行』という記録があります。その文政9年の3月30日の条に矢作橋についての記述があります。同じく3ページ目の史料のところであります。文政9年の「3月30日我々は6時頃に知立を出発し、(中略)岡崎に至る。市(岡崎の市街地)に入る前に矢作川あり。広き砂に中断されたる川床を越えて、日本国最大の橋を築きたり。この橋は甚だ堅実にて、日本にて甚だ貴重さる櫂と桧を用い、この地の藩主の命令にて作りしものにて」とあります。ちょっとこの認識は間違いですね。藩



主じゃなくて幕府、公儀が作ったものだというのが正しい認識になります。「75の弓桁より成り、その長さは自分の計算では930パリ・フィート(メートルに直すと大体283メートルです)日本人の言うところでは208間なり。その横幅は凡そ先ず30フィート(メートルに直すと約9メートル)と推定したり」というふうに書いております。このシーボルトが来た時に、付き添いで川原慶賀という長崎の絵師がいて、シーボルトが川原慶賀に矢作橋をスケッチさせまして、それが現在オランダのライデン民族学博物館に残っております。川原慶賀は当時の状況を忠実に描いているわけですが、これで見ると非常にと大きい橋と言うか、日本一の橋の姿をうかがうことができます。さらにシーボルトは帰国してから『日本』という本を出しますが、その中に川原慶賀が描いた矢

作橋のスケッチが収録されます。さらに下の矢作橋の模型、これもオランダのライデン民族学博物館に残っておりますけれども、10年程前に岡崎の方にも、展覧会でお借りして展示しました。これが模型ですけれども、日本人の大工にシーボルトが作らせて持ち帰ったというものです。実際にこの下のところには矢作川の砂が引っ付いています。シーボルトは江戸へ行く道中に植物採集を行っておりますが、矢作橋の実測もやっております。シーボルトが実測する上で興味を持ったところが絵にあらわれています。それは橋の下側、裏側ですが、橋の構造がわかるように描いていることです。シーボルトは、この日本で一番長い橋が大量の雨が降っても川の流に耐えうる頑強な橋ってというのはどのような構造を持っているかという点に興味を持っていたらしく、橋の長さというよりも関心は橋の構造そのものにあったように思います。その橋桁はどういうふうになっているのかを、緻密に下へ降りて裏側を見ることによって、それをスケッチして実際に測量させて、そのデータを持ち帰ったようであります。この橋の模型も、見てやはり思うのはこれが日本一の橋とはとても思えないようなちっぽけな、長さが1メートルしかないものです。やはりシーボルトがこれをもって表現したかったのは長さじゃなくて、その構造だったと思います。当時の矢作橋ってというのは日本の土木技術の最先端が駆使されているわけで、幕府、国家が威信をかけて造ったものです。いわゆる国家プロジェクトによって造られた橋ってというのはどのような構造を持っているのか。その技術を持って帰るのがシーボルトの狙いであったということが、こうしたことからもうかがい知ることができるわけであります。次に、旅人が見た矢作橋の記録で朝鮮通信使の『海槎日記』って言うのがありますけれども、ちょっと読むのは時間の関係で省略させていただきますけれども、史料です。朝鮮通信使が来て日本一の橋だけでも、自分の国にはこれをさらに上回る、「はむふんの萬世橋」というのがあるようで、これに比べたら橋の長さはわずか3分の1にならないというようなことを書いてまして、まあちょっとお国自慢というか、日本に対する対抗意識みたいのが出ています。こうした旅人が見た矢作橋に関する記述は、まだこのほかにたくさんございます。



130 矢作橋模型
シーボルトが日本人大工に造らせたもの。

4. 架け替え工事

次にこの矢作橋の架け替え工事についての話を進めていきます。先程お話をいただいたように公儀普請が原則で、あと御手伝普請、領主普請があるというようなことをお話致しました。この橋は幕府が造って、平常の管理は岡崎藩の仕事なんです。橋が流されないように常に監視するのが地元岡崎藩の役割です。矢作川の水かさが通常3尺あると

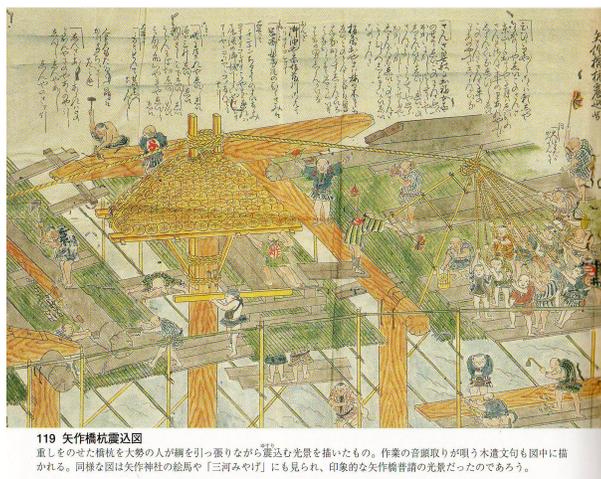
ころが、例えば5尺になつたりすると矢作村とか八丁村から岡崎藩の方に、両村の庄屋から岡崎藩に注進があつて、水かさが増えているという状況が伝えられます。すると、橋の流出を防ぐために色んな方策が行われたようであります。例えばこれは宝暦10年の矢作村の記録ですけれども、7月19日から20日までの間に、橋の上に大きな桶を置いてそこに水を張って、重しをして橋の流出を防ぐというようなことが記録に出てきません。旧市史掲載の伝馬町の庄屋留帳にも岡崎の町々から桶を出して、水を張って橋の流出を防ぐような努力が行われたことがでできます。

江戸時代最後の矢作橋架け替えになりますけれども、工事のプロセスをここで紹介させて頂きます。天保8年8月14日に大風雨にて矢作橋が大破しました。その後、その年の11月に幕府の見分が行われます。日本の大動脈である東海道の架かる橋でこれが通れないということは不便であるために、その間、船による通行が行われます。橋が流れた後は、ある期間までは岡崎藩の領主が御馳走船と言って無料で船を出します。ところがある一定期間過ぎますと、渡船業務が幕府の管轄下におかれまして有料の渡船になります。この時は、天保9年10月10日から幕府の赤坂代官所の管轄になって有料渡船が行われたようであります。こうしたある一定期間は無料の御馳走船が出されていても、それを担うのは岡崎藩領の領民です。大庄屋から通達が出まして村々から人足が出され、それによって渡船業務が担われるということで負担は領民に転嫁されるわけです。こうした一定期間御馳走船が出されて、後は幕府の管轄になって請負人が渡船業務を行います。こうした橋架け替え中の渡船は、豊橋の吉田大橋でも同じです。天保9年2月には幕府作事方役人、棟梁が見分して今回の橋を直すにはどのくらいお金がかかるか見積もるための見分が行われます。天保10年3月には作事奉行若林佐渡守、今回の工事の最高の責任者ですが、以下幕府役人44名、家臣170名がこの岡崎に到着します。そして工事が終わるまで八丁村と矢作村に分宿します。大勢の人間が寝泊りするために八丁村と矢作村は非常に賑わうことになります。更にはこれらの人たちが消費することや、工事での材木などの需要のために岡崎城下の物価にも影響が出てきます。この工事の最高責任者の若林佐渡守は途中で病気になり、のちに梶野土佐守に責任者が代わります。梶野土佐守は、この天保年間の架け替えの記録を残しています。『三州矢立筆記』というものでありまして、西尾の岩瀬文庫に残っております。『愛知県史』の西三河資料編にも収録がされておりますので、興味のある方はご覧頂きたいと思います。この工事は、天保11年1月25日に完成しまして、幕府役人の出来栄見分が行なわれます。出来栄見分を行なう幕府役人は、遠州中泉代官の例が多いのですが、この時は美濃国の笠松代官が見分して地元の岡崎藩に引き渡しました。この見分が終了して天保11年1月26日に渡り初め式が行われ、一般の通行が始まります。この架け替え工事に必要な材木の調達について、どこから木を運んで来るかというのは、判らない部分もありますが、延宝年中の架け替えの時には紀州の和歌山から運んできたようであります。宝暦11年の架け替えの時に大坂、それから天保11年の架け替えの時には三州の大ヶ蔵連の御林、幕府の山ですね、そこから伐り出しています。大坂とか和歌山から持ってくるのは、海、

三河湾を経て平坂から矢作川を遡上させてくるわけですが、具体的にどのように運んで来るかというのは詳しいことは判りません。

それから、この架け替えの工事のための材木などの運搬は、これを請け負う商人がいます。延宝2年の時には大坂の商人と三州鷲塚村の廻船問屋である片山家が請負人になりました。片山家はご子孫の方が岡崎市内にお見えでして、この家の資料を借りて展示したこともありました。史料がその史料の一部です。内容を読むのは省略させていただきますけれども、この時はどうも江戸で請負人決定の入札を行ったみたいです。去ル戊年というのは、寛文10年になりますけれども、江戸において入札をもって三河国岡崎の五郎左衛門に請負人が決定し、さらにその請人に片山家になったようです。材木を紀州徳川家領分の勢州大杉谷から木を伐り出したようであります。幕府の規定の太さ、長さ、基準に見合う物を出すことを義務付けられるわけですが、請け負った商人の方も実際に規格に見合う数の分の材木を出せなかったようです。幕府の側は木を削る関係で規定の大きさより若干大きめのサイズを出すように注文をつけますが、商人側はそれを見越して木を出します。結果は規定の木のサイズより小さめのものが集まったようで、幕府の方から規定の請負金額が出されなかったようであります。このため片山家は、幕府に対して当初の請負金額通りの支払いを求めて願書を出したわけなんです。幕府の請負の仕事というのは余り儲からないようでありまして、後ろから6行目のところに「請負の者共、何も身上破滅仕候ても、御用相調えがたく、難儀千万に存じ奉り候へども」とあるように、ほとんど儲からない仕事でした。特に洪水があると折角伐り出した木が流れて、この時はどうも2回程洪水で木が流れて、そうした分も全部片山家の負担になったようであります。こうした請負人はこの他、正徳5年には、勢州松坂・小井出孫兵衛とか、この三河だけじゃなくて、全国に入札の触れが出て、財力のある商人がこの請負入札に参加しているようであります。

次に、この工事の実際の様子をお話したいと思います。スクリーンの方をご覧頂きたいと思います。こちらは「矢作橋杭震込図」という当時の工事を描いた貴重な図であります。この図は岡崎藩の城主でありました水野家に伝わった史料で、現在東京都立大学に所蔵されるものです。非常に面白い興味ある図です。橋を一本ずつ川の中にぐいっと埋め込んでいくにあたって、上に石俵

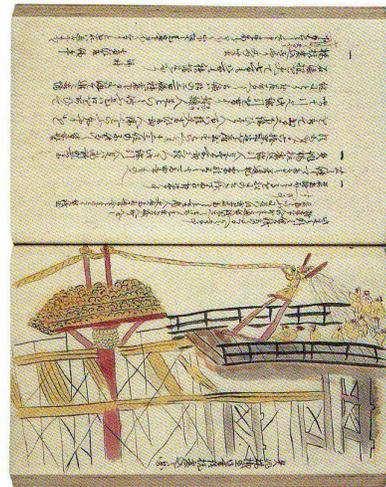


119 矢作橋杭震込図
重しをのせた橋杭を大勢の人が綱を引っ張りながら揺込む光景を描いたもの。作業の音取りが鳴る木遣文句も図中に描かれる。同様な図は矢作神社の絵馬や「三河みやげ」にも見られ、印象的な矢作橋普請の光景だったのであろう。

を、300か400ぐらい置いて、それをみんなで揺すりながらぐいぐいと砂地の中を埋め込んでいく図であります。当時の矢作橋工事の有り様がこれによって判ります。図の上に文章がずらずらっと書いてあるのは、これは木遣歌で、真ん中辺りで旗を振ってやっ

ている人が掛け声を掛け、この木遣歌を歌っている人かと思われます。この「矢作橋杭震込図」というのは橋の架け替えの時の非常に珍しい光景だということで、当時の人々もこれを記録に残しています。

ここでは『三河美やけ』と言って、これも幕府の役人が三河に来て記録したものですけれど、その中に光景について記されていますので紹介したいと思います。史料 になります。これを読ませて頂きます。「矢作橋杭震込綱引人足一か所2・30人ずつ、この綱引人足は当所の者にて15歳より60歳までを雇出すといへとも、12・3位の子供多し、みな前髪を取て出るなり、下払い1人180文、音頭取2人払なりといふ、気やりを吹て引なり、この綱引人足を昔より鮫鱈人足といい伝う、是は口をあいて綱にとり付故なるへし、土俵は始めの2・300俵程震下るに從て追々相増し、石俵などを受て700も800も積み増すなり」と書かれています。ちょうど右下のところを見ますと、この鮫鱈人足というか、これが多分『三河美やけ』に言う鮫鱈人足でしょう。よく見ると、どうも子供らしき人物が描かれています。前髪を取って、あどけない顔をしている子供達です。12、13歳くらいの子供たちが、口を開けてアーンと引っ張りながら杭をぐいぐいと回しどんどん震込んでいくわけです。こうした矢作橋の工事は当時の岡崎の子供達のお小遣い稼ぎの場にもなったようで、賃銭も記されています。先程の震込図は、岡崎城主であった水野家文書に含まれるものですが、この震込図と同様の絵は『三河美やけ』の記録などにも描かれています。そこに描かれた土木技術というのは、当時の日本の最高の技術だったようであります。現在の宮大工の方にこれを見て頂いたところ非常にびっくりしておられました。当時の先端の技術がこの矢作橋に駆使されたとみられます。工事が完成すると、幕府役人達は工事の完成を記念しまして矢作神社、これは橋のたもとにある神社ですが、それから八丁の側ですと諏訪神社に絵馬を幾つか奉納しています。

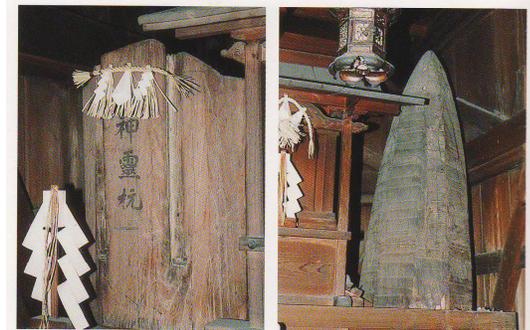


今スクリーンに出させて頂いているのは延享年間に工事をやった江戸の大工さんが、矢作橋の設計図を書いて矢作神社に奉納した物であります。矢作神社に残されている絵馬で、ちょっと擦れていて判り見づらいんですけども、橋の上において東西に人々が綱を引っ張る祭礼の様子を描いているものがあります。橋の下にはだし船がみられ、祭礼を描いているようであります。これは延宝2年の工事の時に奉納されたものであります。架け替えが終了したあと矢作橋の古材というのは大事にされまして、杭の払い下げが岡崎藩によって行なわれます。欲しい者は願い出るように、回状が出され、多くの人々が杭を入手し、再利用しながら現在に伝えています。矢作橋のたもとにあった八幡社にも橋の杭が神様として奉られています。右側が橋の杭の先端部分ですね。神霊杭という

ことで神様になっておられるようなんですけれども、右側の杭の先端部分、これは樅材で作られていまして、この写真ではちょっと判らないんですけども、10角形に先端部分がなっています。この先端部分に鉄の帽子を被して、更にこの側面に鉄板を張った跡が窺われます。なぜ鉄の帽子と鉄板を付けたかですが、多分砂地の中に埋めた時に抜けないようにするための工夫じゃないかと思われます。これは矢作の岩月家、先程の『矢作御橋記録』が残されている家ですが、同家では矢作橋の杭で臼を作り活用していました。それからこちらは伝馬町の大黒屋さんに残されている矢作橋の材で造った大黒様と恵比寿様です。このように、矢作橋の古材というのは廃棄されずに、例えば幕府が使い残した木で矢作神社の社殿を改築したことも記録に出てきます。更に橋の杭を貰い受けて連尺町の太田家では家の大黒柱にしたというような言い伝えもあります。あと、先程の請負商人で鷲塚の片山家にも橋の木で作った大黒様が伝わります。いずれにせよ橋の杭が非常に大事にされて、更に岡崎の城下の商人の家では、やはりその橋のお陰で商売が成り立っているとか、商売繁盛になったとか、そうしたことを願いを込めてこうした恵比寿様とか大黒様が作られるようであります。橋と岡崎の城下の商人との結びつきを示す上でも非常に興味あるものであります。



126 矢作橋杭打図額
延宝2年6月に掛替えの完成した矢作橋を祝して奉納されたもの。橋上一本の杭を中にして多くの人が左右に分かれ、綱を引いて杭を揺すり込むところを描き、橋の下にはだし船二艘、遠景に矢作神社を配する。上部に「奉納御賀」、左に「延寶二甲寅、三島郡海部矢作明神」とある。



154 矢作橋橋杭
岡崎市矢作町八幡社に祭られている橋杭。「三河みやげ」によると、橋近くに柱杭大明神があり、矢作橋の東より二列目の中杭を古来より神君柱と言いつた、この抜きたる柱を祭つてあるとあるが、この八幡社の柱杭であろうか。杭は頭柱と先端部の二片あり、ともに樅材。先端部分は周囲を十角形に作り、円錐状の鉄帽を被せて大釘を打って杭木に取り付け、さらに十面角の隔面にも鉄板をそれぞれ釘付けにしたようである。

て、更に岡崎の城下の商人の家では、やはりその橋のお陰で商売が成り立っているとか、商売繁盛になったとか、そうしたことを願いを込めてこうした恵比寿様とか大黒様が作られ



153 矢作橋の柱で造った臼
直径48cmほどある。

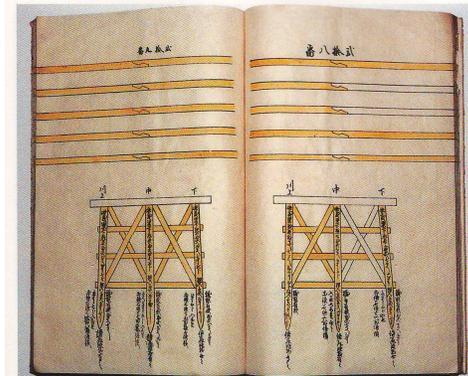


矢作橋材で造られた大黒・恵比寿
岡崎伝馬町大黒屋の店内に祀つてあったもの。底裏にそれぞれ「三州矢作橋登三枚彫形、天明元辛丑年七月大良日、開眼師 日進合瓜」とある。

るようであります。橋と岡崎の城下の商人との結びつきを示す上でも非常に興味あるものであります。

この架け替え工事というのは非常に大変でして、全部の杭を替えると156本になります。こういうふうに川上に1本、川下に1本、真ん中に1本の組が全部で52組あります。3本ずつあるので156本。寛政年間には、この156本のうちの139本を新しい杭に替えています。先程の震込の図のようなことを全部それぞれやっていくわけですから非

常に大変な工事であるわけです。この図はどれだけの俵、石の入った俵を載せたら杭が入ったかというのを全部記録している非常に面白い記録です。橋杭のなかには思うように入らないことがあったようで、『矢作御橋記録』によりますと、延享2年から3年の工事では、西より11組目の真ん中の杭がどうしても入らなかったようであります。その時にその杭の上に神棚を飾って御幣・金弊紙を飾って、矢作神社の神主が祈願したところすんなり入ったというような記録が残されております。



時間があまりございませんので残りのところは駆け足で行きたいと思っておりますけれども、矢作川の渡船、橋のない時代は古いところでは古代の承和2年、太政官符で矢作川に渡船2艘増加という記録がございます。中世になるとこうした官営渡船が無くなって私営渡船になってゆきます。近世においては橋が流れた時には、先程申しましたように岡崎藩の無料渡船がある期間行われます。御馳走船です。それが後に幕府中泉代官所管轄による有料渡船に変わります。その幕府代官所管轄の渡船でも請負人がおります。それを一覧表にしたのが表でありまして、2ページ目の左側に請負人をまとめておきましたのでご覧頂きたいと思っております。やはり特徴的なのは天竜川の一番河口部分に位置する遠州池田村の方から、わざわざ矢作川の渡船の請負人に参入してくることであります。安永9年から天明元年、それから文化14年にも遠州天竜川池田村からの参入が見られます。ここに5分、4分、1分というのは渡船賃の分け前を分配する比分を書いているわけです。天竜川の池田村の芥川とか半場という人物が度々出てくるわけですが、こうした遠州から何故来るのか。これは当時の請負の入札が三河の幕領を管轄する遠州中泉の代官がこれを行うためかと思っております。そうした関係があって、遠州から商人が来て請負をやるわけです。宝暦の12年に矢作神社に奉納された絵馬の中にも、この三河の商人の他、遠州池田中渡船方、半場善右衛門、芥川とか奉納者の名前が出て来ます。

この架け替え期間中の渡船賃というのは、基本的に武士は無賃です。これは文政11年の渡船高札というのが岡崎の脇本陣の杉山さんという家に残されていまして、その中に「奉公人の他定めを通り賃銭出すべし」とあることからわかります。奉公人というのは武士のことを言いまして、その他は定められた、幕府が定めた渡船高札に示された賃金を出すべしというふうなことを言っております。面白いのは、幕末期になると武士か農民か判らないような身分の者があらわれます。このために矢作川の役人が渡船の賃金を取って良いのか迷った事例があります。史料 なんですけれども、読むことは控えます。幕末期になると西大平藩では農兵を取り立てます。西大平藩は市内の大平に陣屋がございますね。西大平藩の領地は主に豊田市とか三好町の方にございまして、ここの史料で申しますと、史料 なんですけれども、乙尾村とか打越村、宮口村、それから黒笹村

とか明知村とかがこれに当たります。いずれにしても矢作川より西に位置しまして、そこで普段百姓をしている者が農兵に取り立てられて、刀を差して矢作川を渡って大平の陣屋まで行くわけです。当時、渡船賃を徴収していた者、これは矢作村と八丁村の者が請け負っていたのですが、渡船賃を徴収してしまったのです。それに対して西大平藩は、これは武士だから無賃だと主張するのです。矢作村と八丁村の役人の言い分としては、普段百姓をやっているのに、たまたま着服の衣類に西大平藩主大岡家の紋が付いて、刀を差しているけれども普段は百姓であるという理由から、渡船賃を取ったことの正当性を主張するわけです。非常に内容が面白いので、またゆっくりと読んで頂ければと思います。幕末期になると身分制そのものも非常に曖昧になってくる中で、この渡船の賃金をどうするのかというようなところですね。こうした問題が起きてくるということでもあります。

5. 矢作橋と岡崎宿

それから最後の矢作橋と岡崎宿ということに入ります。安政2年以降矢作橋はずっと架けられずに基本的には明治10年まで20年近く橋が架けられなかったんです。明治4年に仮橋が架けられますが、將軍家茂の上洛の時には、船橋が設けられ川船150艘が調達されました。これは「大宝年代記」という中畑村の船頭さんの記録ですが、この中に「誠に船のもの迷惑の次第に御座候」ということで、この川船を命じられて、そのために商売の船稼ぎが出来ないということで、非常に迷惑だということを書いております。当時、橋がないことによって、岡崎の城下の商人たちは非常に困ったようです。橋の向かいの西側から青物という、いわゆる生鮮野菜等が入って来ないために、城下の物価が高くなり、助郷に不便であるということで何とか橋を架けてくれ、普請してくれという嘆願書が岡崎の町から出されます。幕府は当時財政難の時代でして、橋については架けることはしません。その中で要求として矢作川渡船業務を幕府管轄でなくて岡崎藩管轄が行えるようにしてほしいという運動が起きます。その結果、文久2年にこれが認められて、岡崎藩の差配によって渡船が行われるようになります。いわゆる幕府じゃなくて岡崎藩の采配で、藩領の者は通常の料金の半分で渡船できるようになります。このなかで渡船請負で力を持っていた遠州池田村を排除していくというような動きも出てきますが。

時間が来ましたので、最後のまとめをさせていただきます。この矢作橋というのは旅人だけのものじゃなくて、岡崎の町と非常に結びついてということです。江戸時代の矢作橋について、土木技術史上から見てもこれを解明することは貴重であり、日本一の長さで最高の技術、こうした歴史的事実、これは現代への遺産だというふうに思います。この事実は、岡崎が後世に伝えていかなければならないことがらじゃないかなと思っております。今日のお話は以上で終わりにさせていただきます。ご静聴どうもありがとうございました。